国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
令和2年8月1日発行　第44巻第8号通巻第515号

月刊みんぱく

2020 8月号

特集

ヒトと感染症

ミアズマ説再考　門司和彦
中国医学の可能性　飯島渉
感染症対策の担い手と物の配置　浜田明範
感染症対策と人びとの参加　白川千尋

個体的生命観の敗北

内山 節（うちやま たかし）

ウイルスは、関係する世界のなかに生命基盤をもつと感じている。自然と自然の関係、自然と人間の関係、人間と人間の関係のなかを巧みに漂い、泳ぎながら、その生命的世界を再生産している。おそらく、一個のウイルスがひとつひとつ独立した生命体だと考えるのは誤りだろう。ウイルスは関係し合う生命であり、今日的にいえば、そのネットワーク自体がひとつの生命体なのである。つまり、関係し合うことによって共同生活圏を確立する生命体だと思えばよい。だからその多くを抹殺することに成功しても、何らかのきっかけがあれば、変異しながらネットワークを再構築することができる。

本当は、人間もふくめて、同じような生命体なのである。呼吸をすることによって、食事をとることによって、人間はたえず自然との関係を成立させている。さらに人々との関係、歴史や文化などとの関係のなかで、私たちは生命の再生産をしている。この関係が持続すれば、たとえ個々の人間は死を迎えることはあっても、人間という生命世界は展開しつづけることができる。生命の基盤は個別性にあるのではなく、関係性の方にある。

ところが人間は一人ひとりが個別的生命体だと思っている。私は私だけで独立した生命体であり、すべての人が同じように独立した生命をもっている、と。そういう精神現象を伴いながら生きているのが人間である。

現在の新型コロナウイルスの問題は気持ちが悪い。どういうウイルスで、どのように感染していくのかもよくわからないという気持ち悪さもある。さらにこのウイルスとともに展開している今日の世界も気持ち悪い。国民としての自覚が求められ、政治家たちは強い指導者であることを競争しながら、不気味な「全体主義」が広がっていく。この状況に免罪符を与えているのが、証明されていないことを真実であるかのごとく語る医学という名の科学であり、国家の権威だ。これは近代社会がくりかえし遭遇してきた災難のかたちである。

だがこのふたつだけが、現在の気持ち悪さをつくりだしているのではない。関係のなかで生きるウイルスというみえない生命体の拡大が、個体的生命だと信じる人間の生命の世界をむしばんでいく。すなわち誰もが依存している生命の基準が、みえないウイルスによって虚無化されていくことに、人間は根源的な気持ち悪さを感じている。

プロフィール
1950年東京都生まれ。哲学者。存在論、労働論、自然哲学、時間論などについて考察。NPO法人・森づくりフォーラム代表理事。1970年代から東京と群馬県上野村を拠点として暮らす。『労働過程論ノート』（田畑書店）にて文壇デビュー。おもな著書に『内山節著作集』、『主権はどこにあるのか』（ともに農山漁村文化協会）。趣味の釣りに関する著作も多数。

月刊 みんぱく
8月号目次

1 エッセイ　千字文
個体的生命観の敗北
内山 節

特集　ヒトと感染症

2 ミアズマ説再考
——新型コロナウイルス感染症の流行に寄せて
門司 和彦

4 中国医学の可能性
——新型コロナウイルス感染症へのオルタナティブ
飯島 渉

6 感染症対策の担い手と物の配置
——西アフリカの事例から
浜田 明範

8 感染症対策と人びとの参加
白川 千尋

10 ○○してみました世界のフィールド
バリ島トゥンガナン暦カレンダーを作る
山本 泰則

12 みんぱく Information

14 世界のバスケタリー×バスケタリーの世界
バスケタリーに満ちた供物の世界
中谷 文美

16 みんぱく回遊
毛皮、必需品から見栄え重視?へ
齋藤 玲子

18 シネ倶楽部 M
マレーシアの光と影
——「斧は忘れても、木は覚えている」
信田 敏宏

20 ことばの迷い道
「嘉玲」が帰ってきたよ
野林 厚志

21 次号予告・編集後記

特集

ヒトと感染症

二〇二〇年、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の猛威はまたたく間に世界中に広がった。グローバル化が進んだ今日、感染症対策には世界規模での取り組みが求められるが、精神的不安や社会的混乱をも引きおこすさまざまな感染症と、我々はどのように向き合っていくべきなのだろうか。

ミアズマ説再考
――新型コロナウイルス感染症の流行に寄せて

門司 和彦
長崎大学教授

この小文が読者の目に触れるころのCOVID-19の世界流行状況は予測できないが、情報が溢れ、消費され、情報疲れがおきていると想像できる。そんななか、少ない字数で何を書くか迷ったが、人類が感染症を如何にとらえてきたかに関連して、ミアズマ（miasma・瘴気）説を再考してみた。

流行病の正体

「悪い空気」が「体内の四体液のバランス」を壊して病気をおこすという考えは紀元前のヒポクラテスの時代からあった。これがミアズマ説の原型である。マラリアは、夜に吸血する蚊による原虫の伝搬が引きおこすものだが、その事実が知られておらず、湿地に発生する夜の「悪い（mal）空気（aria）」、すなわちミアズマによって流行すると考えられた。

一九世紀後半にパスツールとコッホが病原体説を確立するまで、ミアズマ説は病因論の中心的地位を占めた。当時の偉人であるウィルヒョー、ペッテンコーファー、チャドウィック、ファー、ナイチンゲールらはミアズマ説を支持し、公衆衛生と科学の進歩に貢献した。

「ミアズマ」ということばは一六六五年の「ロンドン大疫病」から英語として使われだした。この年、ペストはアムステルダムから衛生状態が悪い猛暑のロンドンにもたらされた。ペストは古くからあったが、五四一～二年のユスティニアヌス時代に東ローマ帝国で第一次流行があり、それは八世紀末まで続いた。第二次は一三四六～五〇年にヨーロッパで大流行した「黒死病」で、この流行が一七世紀のロンドン大疫病まで散発的に続き、いろいろな意味で中世を形作った。この時代、ペスト以外にも、天然痘、チフス、結核、ハンセン病などが蔓延していた。ペストの一種である腺ペストは、ネズミに寄生する蚤（のみ）が人から吸血する際にペスト菌が感染して発病する。その後に、患者や犬、猫につく蚤による感染、患者の体液がついた衣服等からの接触感染、肺ペスト患者からの飛沫（ひまつ）感染もおこった。二年間でロンドンの人口の一五～二〇パーセントにあたる七万五〇〇〇～一〇万人が死亡し、流行は一六六六年の「ロンドン大火」で終焉（しゅうえん）し、その後、ロンドンの再開発が進んだ。当時のペストの恐怖は、致死率、感染人口割合からして今回の新型コロナウイルスの比ではなかった。少なくともわたしたちは流行の正体をウイルスだと知り、科学的な感染防御方法も知っている。衛生状態が悪く、人が密集した地域でペストが発生したことがミアズマ説の根拠となった。

リーフェ・フェアシャウアー作 《1666年のロンドン大火》 17世紀後半
ブダペスト国立西洋美術館蔵、2020年
この大火がロンドンのペスト流行の終焉につながった

時代は下って一九世紀中ごろ。産業革命で労働者階級の人口が急増し、生活環境は再び悪化し、上下水道は完備されず、不衛生で悪臭が漂うロンドンをコレラが襲う。このころ「ミアズマ」は植物や動物の死骸・腐敗から生まれる悪臭と同義になっていた。一八五八年夏にロンドンを「大悪臭」が襲い、都市衛生の改革が急務となる。一八五四年のスノウの疫学的研究で水系感染の証拠がそろっても、ミアズマ説は支持され続けた。

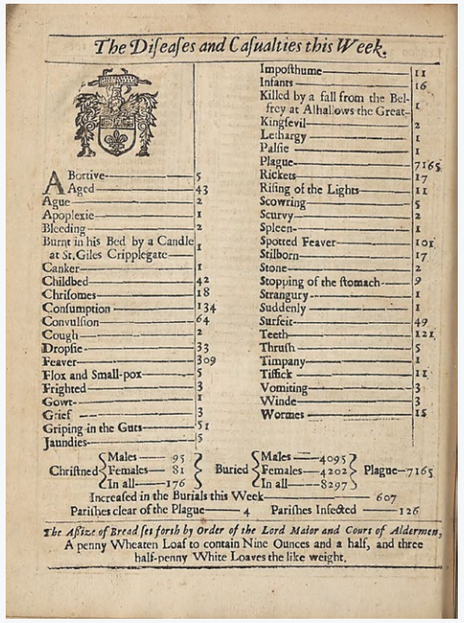
研究のあり方を問う

なぜ、ミアズマ説は長く支持されたのだろうか。ミアズマ説支持者も、接触感染がおこること、梅毒が性的接触でおこること、天然痘が人痘接種で免疫され、ときには死亡することなどを知っていた。しかし、それだけでは疫病が、ある地域のある季節に大量に発生する現象や、クラスターが発生するメカニズムを十分に説明できず、ミアズマを想定することが科学的だと思われた。

今回、クルーズ船、軍艦、ライブハウス等で集団感染がおこり、飛沫核感染、エアロゾル感染がクローズアップされた。エアロゾル感染は下気道で感染がおこるため、重症例が多いのかもしれない。クラスター発生を考えるとミアズマ説は、原理は間違っていたとしても、それなりの説得力をもつ。ミアズマ論者であったナイチンゲールが換気の重要性を強調した点が思いおこされる。

もうひとつの解釈がある。ミアズマ説支持者は環境と社会状況に着目し、疾病を病原体というひとつの原因に還元することを拒否した。現在の感染症学は細菌学・ウイルス学・近代疫学に基づき精緻な還元主義にたっている。一方、公衆衛生学は、社会や環境とのかかわりを配慮し、文脈のなかで答えを探そうとする。一九世紀の環境衛生改革はその思想のうえに成り立っていた。

今回の新型コロナウイルス感染症の流行についても、還元的なアプローチと、統合的な広義の公衆衛生学の共同が不可欠である。人文社会科学も含めて、両者をどう糾合させていくか。二一世紀の叡智（えいち）が求められていると思う。

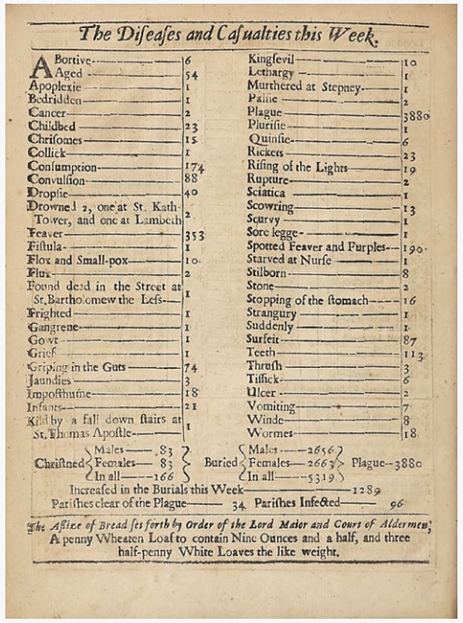


The Diſeaſes and Caſualties this Week.

Abortive	5
Aged	43
Ague	2
Apoplexie	1
Bleeding	2
Burnt in his Bed by a Candle at St. Giles Cripplegate	1
Canker	1
Childbed	42
Chriſomes	18
Conſumption	134
Convulſion	64
Cough	2
Dropſie	33
Feaver	309
Flox and Small-pox	5
Frighted	3
Gowt	1
Grief	3
Griping in the Guts	51
Jaundies	5
Impoſthume	11
Infants	16
Killed by a fall from the Belfrey at Alhallows the Great	1
Kingſevil	2
Lethargy	1
Palſie	1
Plague	7165
Rickets	17
Riſing of the Lights	11
Scowring	5
Scurvy	2
Spleen	1
Spotted Feaver	101
Stilborn	17
Stone	2
Stopping of the ſtomach	9
Strangury	1
Suddenly	1
Surfeit	49
Teeth	121
Thruſh	5
Timpany	1
Tiſſick	11
Vomiting	3
Winde	3
Wormes	15

Chriſtned { Males 95, Females 81, In all 176 }
Buried { Males 4095, Females 4202, In all 8297 } Plague 7165
Increaſed in the Burials this Week 607
Pariſhes clear of the Plague 4 Pariſhes Infected 126

The Aſſize of Bread ſet forth by Order of the Lord Maior and Court of Aldermen.
A penny Wheaten Loaf to contain Nine Ounces and a half, and three half-penny White Loaves the like weight.



The Diſeaſes and Caſualties this Week.

Abortive	6
Aged	54
Apoplexie	1
Bedridden	1
Cancer	2
Childbed	23
Chriſomes	15
Collick	1
Conſumption	174
Convulſion	88
Dropſie	40
Drowned 2, one at St. Kath. Tower, and one at Lambeth	2
Feaver	353
Fiſtula	1
Flox and Small-pox	10
Flux	2
Found dead in the Street at St. Bartholomew the Leſs	1
Frighted	1
Gangrene	1
Gowt	1
Grief	1
Griping in the Guts	74
Jaundies	3
Impoſthume	18
Infants	21
Killed by a fall down ſtairs at St. Thomas Apoſtle	1
Kingſevil	10
Lethargy	1
Murthered at Stepney	1
Palſie	2
Plague	3880
Pluriſie	1
Quinſie	6
Rickets	23
Riſing of the Lights	19
Rupture	2
Sciatica	1
Scowring	13
Scurvy	1
Sore legge	1
Spotted Feaver and Purples	190
Starved at Nurſe	1
Stilborn	8
Stone	2
Stopping of the ſtomach	16
Strangury	1
Suddenly	1
Surfeit	87
Teeth	113
Thruſh	3
Tiſſick	6
Ulcer	2
Vomiting	7
Winde	8
Wormes	18

Chriſtned { Males 83, Females 83, In all 166 }
Buried { Males 2656, Females 2663, In all 5319 } Plague 3880
Increaſed in the Burials this Week 1289
Pariſhes clear of the Plague 34 Pariſhes Infected 96

The Aſſize of Bread ſet forth by Order of the Lord Maior and Court of Aldermen.
A penny Wheaten Loaf to contain Nine Ounces and a half, and three half-penny White Loaves the like weight.

右：1665年8月15～22日のロンドン傷病統計。1週間の総死亡5319例のうち3880例がペスト
左：1665年9月19～26日のロンドン傷病統計。1週間の総死亡8297例のうち7165例がペスト
（出典：*London's dreadful visitation, or, A collection of all the bills of mortality for this present year,* London, 1665.
U.S. National Library of Medicine）

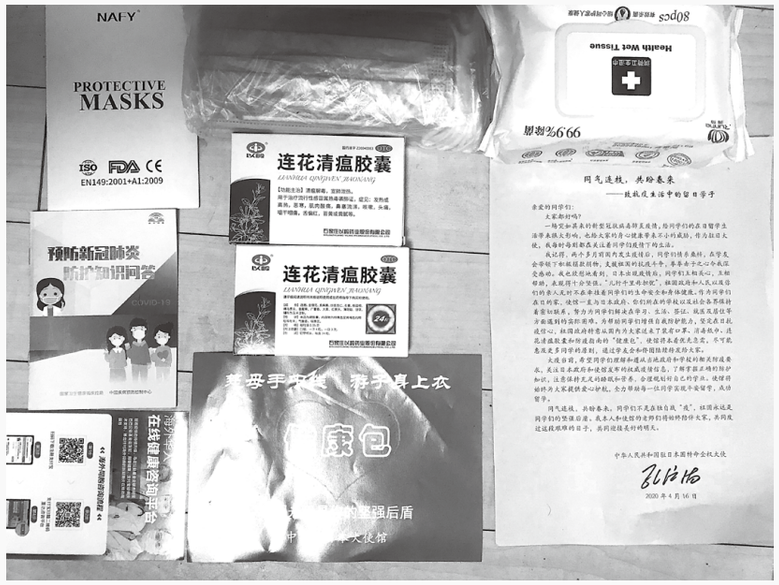
中国医学の可能性
――新型コロナウイルス感染症へのオルタナティブ

飯島 渉
青山学院大学教授

ロックダウンという対策

中国、湖北省武漢市が起源だとされる新型コロナウイルス感染症は、中国からヨーロッパや米国、そしてアフリカなどに拡散し、パンデミックとなった。世界は今、本当に震えている。

ウイルスの特徴がまだ解明できないこと、そして、治療薬やワクチンの開発が追いつかないことが、世界をコロナ以前と以後にわける要因である。そのため、ヒトの行動を制限し、ウイルスの感染を防ぐ公衆衛生的な対策が中心になった。中国政府がとった武漢市や湖北省全域を封鎖するという大規模な対策は、はじめ諸外国を驚かせた。しかし、結局のところ、諸外国もいくつかの例外を除き、中国政府に倣ってロックダウンを選択した。日本はその例外のひとつで、自粛による行動変容を中心として、現在のところは感染拡大の抑制に成功している。考えてみると、人類は都市化や工業化という、人口の集中を通じて商品を大量に生産し、それを消費することによって経済社会を回転させ、文明を発達させてきた。今回の新興感染症はそれ自体を変えなければ、拡大を防げないというのだから、文明史的な転換点となるかもしれない。



駐日中国大使館が留学中の中国人学生にくばった健康キット（健康包）。マスクとともに「連花清瘟膠囊（れんかせいおんこうのう）」という中国医学の薬も入っていた（撮影：陳涛、2020年）

治療薬やワクチンの開発

中長期的に見れば、大都市への集中を制限するとか、人が集まって会議をするという習慣が見直されるかもしれない（わたし自身は、これには反対ではない）。しかし、ここまで増加した世界人口を養うためには、すべてをリモートでおこなうことは難しいから、短期的にはやはり治療薬やワクチンの開発に期待せざるを得ない。その成否が東京五輪の開催の鍵を握っている。

感染症の歴史を見れば、さまざまな治療薬やワクチンが開発され、その流行が抑制されてきたことも事実である。現在、昼夜をわかたず、世界中で研究開発が進められている。日本も同様だが、今日明日にも利用可能になるわけではない。

新型コロナウイルス感染症では抗生物質が効かないので、まず、解熱や呼吸補助などの対症療法のために既存の薬品の効果が検証され、臨床で試されている。これらは基本的にケミカルな薬品である。一時期、抗マラリア薬などが有効だといわれたのも、既存の薬品の場合には副作用がある程度わかっているので、治験に進みやすいからである。

生薬の可能性

新型コロナウイルス感染症の治療薬には、中国医学（「漢方」は日本における中国医学を指す。西洋医学が導入される基礎となったオランダ医学は「蘭方」とよばれる）からもさまざまな試みがある。話題になったのは「双黄連口服液」という解熱剤であった。

その有効性については疑問の声もあるが、中国で流行が抑制されると、中国政府は今回の新興感染症が武漢起源であるマイナスイメージを払しょくする目的もあって、三月後半にはイタリアなどのヨーロッパ、特に東欧諸国へ医療ミッションを派遣し、人工呼吸器などの医療機器や資材を提供する側に回った。これは、現在、中国政府が進めている一帯一路政策の延長線上にある。一帯一路政策には、中国医学の医師の派遣や学校の建設なども含まれている。この背景には、中国医学がオルタナティブ・メディシン（代替医療）ではなく、中国の医療制度のなかに明確に位置づけられていることがある。そのため、大きな病院には必ず、「中医科」がある。

感染症対策でも中国医学は重要な位置を占めている。それは新型コロナウイルスによって始まったことではなかった。マラリア対策の切り札であるアルテミシニン（青蒿素）は、中国の屠呦呦という学者が発見したもので、彼女はその業績によって、二〇一五年にノーベル生理学・医学賞を受賞した。屠は、中国の旧い文献を集め、そこからアルテミシニンの原料となる植物を確定し、それを実用化し、合成がおこなわれた。その意味で、新型コロナウイルス感染症の治療薬やワクチンも生薬から開発される可能性があるのである。

アルテミシニンの原料、和名はクソニンジン
© Kristian Peters, 2007（Wikimedia Commons, CC BY-SA）

2015年のノーベル賞授賞式。右から2人目が屠教授（スウェーデン、提供：時事）

感染症対策の担い手と物の配置

――西アフリカの事例から

浜田明範（関西大学准教授）

アフリカ地域はCOVID-19が猛威を振るう以前からさまざまな感染症に苦しめられてきた。二〇一三年末以降に西アフリカで猛威を振るったエボラ熱の流行は記憶に新しいが、それ以前も対応しなければならない多くの感染症があった。三大感染症のHIV感染症、マラリア、結核。認知度は低いものの、深刻な健康被害をもたらすとされるアフリカ眠り病や河川盲目症などの顧みられない熱帯病。いずれも今でも重大な課題であり続けている。

日曜学校で子どもたちにエボラ熱について説明する看護師（ガーナ、ブランカシ町、2014年）

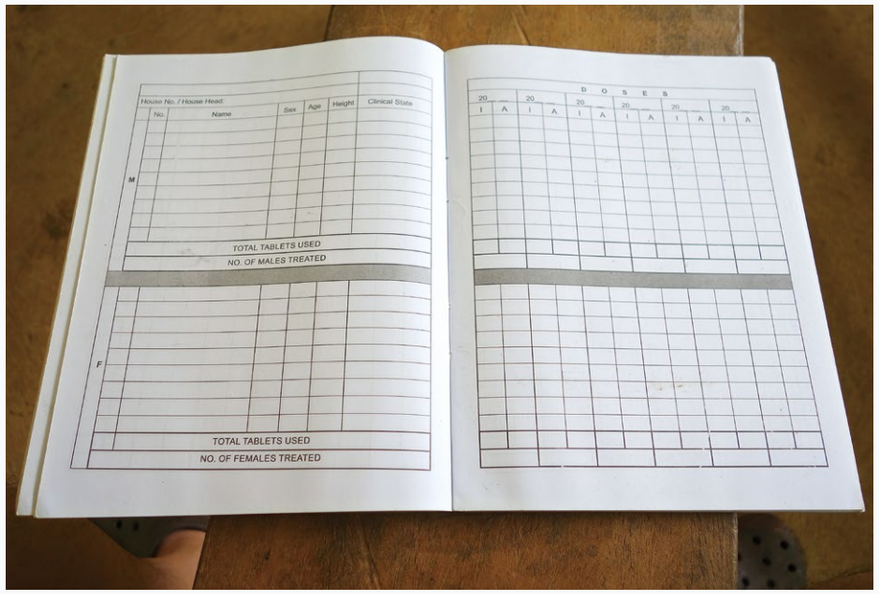
人類学者であれば、それぞれの地域に住まう人びとがどのように独自の対策を洗練させてきたのかについて語るべきかもしれない。しかし、感染症対策は在地の人びとに固有な方法というよりは、国際的な枠組みや国家主導でおこなわれてきていることもまた事実である。そのため、人類学者もまた、グローバルに展開する感染症対策がそれぞれの場所でどのような特異性を獲得しているのかに注意を払ってきた。

感染症対策の担い手

感染症対策と聞くと、ワクチンや特効薬の開発に目が向きがちである。例えば、二〇一五年のノーベル生理学・医学賞はマラリアの治療薬と河川盲目症の予防薬の開発に対して授与されている。エボラ熱のアウトブレイクの際にも、世界中の研究者がワクチンの開発に乗り出した。このように見ると、科学者の世界的なネットワークによって感染症対策が担われているようだ。他方で、ワクチンや薬が開発された後の場面に注目するならば、まったく異なる感染症対策の担い手が見えてくる。

例えばガーナ南部では、河川盲目症に対して、大村智にノーベル賞をもたらしたイベルメクチンという薬剤を流行地域のすべての住民に年に一～二回投与するという対策がなされている。詳細は割愛するが、これを一六～一八年継続すると流行地域から感染者をなくすことができるとされている。しかし、自分がその役割を担うことを想像してみるとわかるように、当該地域のすべての住民に毎年一～二回、遺漏や重複なく薬を投与するというのはそれほど簡単なことではない。ガーナ南部の場合、その役割を担っているのは地域保健看護師に監督されているボランティアである。地元の事情に通じている彼女たちは、夕暮れ時に九〇分程度、五日から二週間かけて担当地区のすべての家をまわり、記録をつけながら薬を配布していく。ボランティアといっても総額十数ドル程度の謝金を手にできるが、労力に見合った金額とは言い難い。彼女たちのような無名の担い手によって西アフリカの感染症対策は進められている。

上：ワクチン接種の記録をつける看護師たち（ガーナ、チュムス町、2012年）
下：ワクチン接種のために集まる母親たち（ガーナ、ブランカシ町、2014年）



イベルメクチンの配布記録をつけるためのフォームが印刷されたノート（ガーナ、ブランカシ町、2016年）

物の配置

繰り返すが、一口に薬を配るといっても、それほど簡単な作業ではない。ましてや、遺漏や重複を避けなければならないとなると、その困難さは増大する。誰が薬を飲んで誰が飲んでいないのかをすべて記憶することなどできようはずもない。この困難を解決してくれるのが、記録をつけるという作業である。記録をつけることは、状況を後から確認するためだけではなく、現在の薬の配布を正確におこなうための手段でもある。これは、イベルメクチンの配布だけでなく、毎日決まった時間に薬を飲む必要のある結核の治療や、乳幼児に対するワクチン接種においても同様である。同時に、いずれの場合も、誰かのつけた記録を後から他の人が確認できるようにする必要がある。とはいえ、手書きの記録を読み解くこともまたそれほど簡単なことではない。その困難さを多少なりとも軽減するために、それぞれの用途に応じて必要事項を記入する枠線が印刷されたフォームが重要なツールとして使用されている。

このように、アフリカでは、薬剤やフォームが印刷された紙といったさまざまな物を巧妙に配置することによって感染症への対策が実施されてきた。COVID-19に対しても、ワクチンや特効薬の開発に期待するだけでなく、各人が日常生活のなかでどのような物をどのようにとり入れるべきなのかについても考えていく必要があるだろう。

結核患者のフォローアップをする看護師たち（ガーナ、ブランカシ町、2008年）

感染症対策と人びとの参加

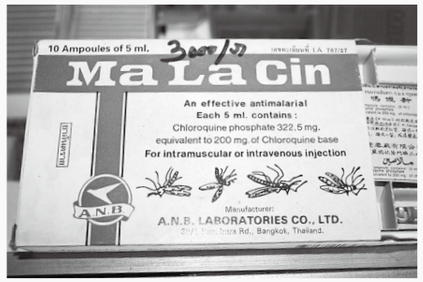
白川 千尋
大阪大学大学院教授

マラリア対策

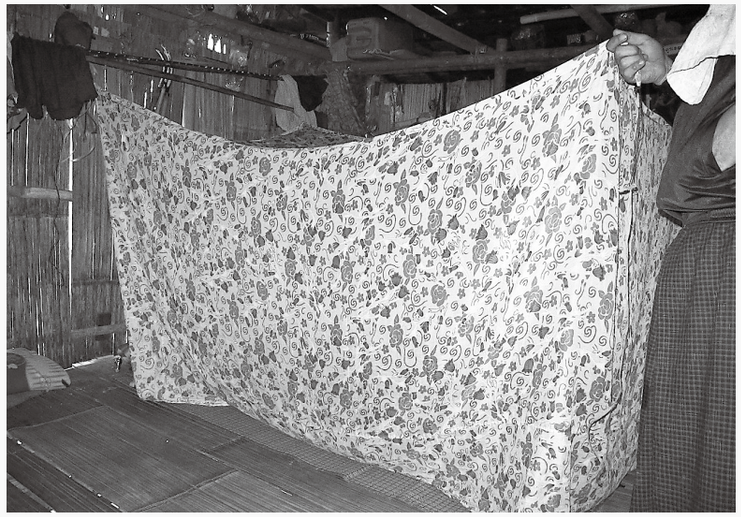
二〇二〇年が始まってほどなくして世界を席巻した新型コロナウイルス。最初に爆発的な感染が起きた中国では、政府がこのウイルスによる感染症にクロロキンが一定の治療効果を示したと発表し、注目を集めた。クロロキンはマラリアの治療薬として使われてきたものである。新型コロナウイルス感染症とは異なり、蚊が媒介する熱病のマラリアは、いにしえより人類を悩ませてきた感染症だ。熱帯や亜熱帯を中心として世界の多くの国々に分布し、現在も一年間に二億人以上が罹患し、四〇万人以上が死亡しているとされる。

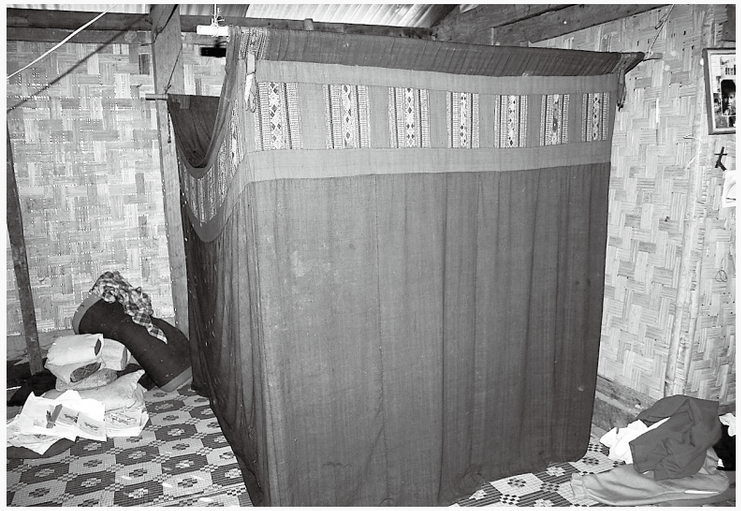
新型コロナウイルス感染症の場合と同じく、マラリアにもワクチンがない。しかし、クロロキンをはじめとして治療薬はある。このため、手遅れにならないうちに罹患者を治療することがマラリア対策のおもな活動のひとつとなってきたが、それとともに各地で盛んにおこなわれているのが蚊帳の配布活動である。マラリアの媒介蚊であるハマダラカは夜行性だ。したがって、夜間に使われる蚊帳が格好の予防具となりうる。近年では熱帯の夜の暑さや寝苦しさに配慮して、網目が大きく通気性のよい蚊帳が作られ、温床地で暮らす人びとに配られている。

しかし、蚊帳が配布されればマラリアも自ずとなくなる、というわけではない。いくら消毒液を配っても、きちんと使われなければ新型コロナウイルスの感染を防げないように、配られた蚊帳を人びとが使わなければマラリアの感染をなくすことはできない。蚊帳を受け取った人びとが持続的に使用すること。つまり、蚊帳の配布という対策活動に人びとが積極的に参加することが、活動の成果を左右する重要なポイントのひとつなのである。



ラオス北部の薬局で売られていたタイ製クロロキン
（ルアンナムター県、2008年）




上：ミャンマーの山村で使われていた網目のない蚊帳（バゴー地方域、2014年）
下：ラオス北部の赤タイ人の伝統的な蚊帳（ルアンナムター県、2008年）

網目のない蚊帳

蚊帳は東南アジア大陸部のミャンマーやラオスに暮らす一部の人びとにとって生活必需品である。これらの人びとが伝統的に使ってきた蚊帳は、マラリア対策の現場で配られているものとは違い、網目のない布で作られている。かつては新婦が自ら織って嫁入り道具として持参し、新郎と一緒に使うのが常だった。「蚊帳＝網目のあるもの」という先入観をもっていたわたしは、この網目のない蚊帳を初めて目にしたときテントのようなものにしか見えず、にわかには蚊帳と認識することができなかった。

しかし、なぜ人びとのあいだでは通気性が悪く、いかにも暑そうな蚊帳が使われてきたのだろうか。人びとの多くは三世代、もしくは四世代同居で、ひとつの大きな部屋のなかで寝起きをともにしている。夜になると、部屋には一家の主夫婦の蚊帳、その親夫婦の蚊帳、子ども夫婦の蚊帳が張られ、幼い孫たちは両親と同じ蚊帳のなかで寝る。そうした暮らしのなかで、大部屋で同居しているそれぞれの夫婦は、通気性が悪い代わりになかが透けて見えない蚊帳を使うことで、自分たちだけの空間を確保することができる。網目のない布で作られた蚊帳は、各夫婦のプライバシーを守る役割を果たしているのである。

マラリア予防のため、蚊帳の使用を促すポスター
（ミャンマー、バゴー地方域、2014年）

人びとの参加をめぐって

マラリア対策のなかで配られている蚊帳は通気性がよい反面、網目が大きく、なかがよく見える。そのため、これはわたし自身が対策活動に携わるなかで実際に経験したことでもあるが、網目のない蚊帳を使ってきた人びとに配布しても使ってもらえなかったり、配ろうとしても受け取ってもらえなかったりすることがある。こうした事態が続いていては活動の成果もあがらないだろう。では、通気性のよい蚊帳のメリットをアピールし、それを使ってもらえるよう人びとに働きかけるべきなのだろうか。

それも大切ではある。しかし同時に、対策活動に積極的に参加してもらえるようにするべく、蚊帳、ひいてはマラリアをめぐる人びとのニーズや見方、考え方などを十分に理解しようとすることも重要だろう。そして、そうした理解に基づいて活動を構想し、実行に移してゆくこと。それがマラリア対策を進めてゆくうえで必要ではないだろうか。このことはまた、新型コロナウイルス感染症をはじめとしたほかの感染症の対策活動にも当てはまるように思われる。

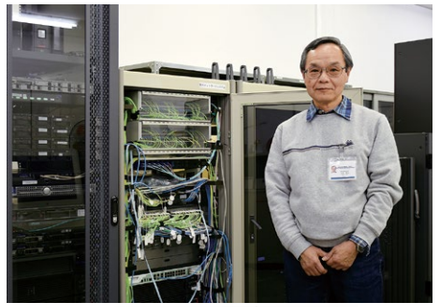
ミャンマー山村のカレン人の家屋。屋内には大きな部屋がひとつある
（バゴー地方域、2014年）

○○してみました世界のフィールド

バリ島トゥンガナン暦カレンダーを作る

山本 泰則（やまもと やすのり）
民博 外来研究員

研究におけるフィールドということばは、何も調査地だけを指すものではない。分野がちがえば、その領域はコンピュータ上へも広がる。今号では、筆者が昔のプログラムと格闘した顛末を紹介する。



民博サーバルームにて。実際はこの部屋に入ることはめったにないのだが（2020 年）

わたしの専門は博物館情報学である。他の同僚とちがって調査するフィールドをもたず、民博に在職した三六年と半年のあいだ、出張以外ほとんど民博に引き篭っていた。今回は、そんな民博で経験したささやかなエピソードを紹介したい。

きっかけは吉本さん

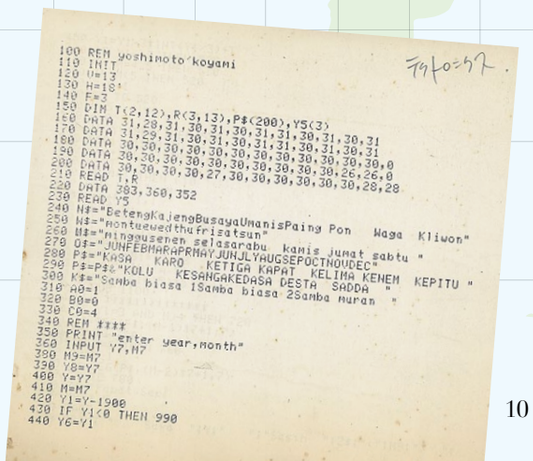
たしか二〇一四年三月ごろだったと思う。民博研究部の廊下を歩いていると、退職を間近にひかえた吉本忍（よしもとしのぶ）さん（現民博名誉教授）によび止められた。「このプログラム、動かない？」と言って簡易製本した古い資料を見せられた。その資料はインドネシアのバリ島東部に位置するトゥンガナン・プグリンシンガン村（以下、トゥンガナン村）で使われている特有のカレンダーと、それを作成するためのコンピュータ・プログラムだった。

吉本さんは世界の織機と織物文化の研究者で、トゥンガナン村も調査地のひとつである。資料のプログラムを作成したのは、コンピュータ民族学の杉田繁治（すぎたしげはる）さん（現民博名誉教授）である。二人はそれを使ってサカ暦一九〇〇年（西暦一九七八年）から一〇年間のカレンダーを作成して一九七九年に村に寄贈したのだが、古くなったので続きを作って提供したいとのことだった。

トゥンガナン暦とは

バリ島特有の暦としてはウク暦やサカ暦が知られているが、トゥンガナン村では、それとは異なる独自の暦にもとづいて年中行事や儀礼をおこなっているという。

トゥンガナン暦では、西暦七八年を紀元とするインド由来のサカ暦で年を数える。しかし、トゥンガナン暦には一年を構成する月数とひと月の日数が異なる三種類の年があり、それが順にくり返される。また、三日周期と五日周期でくり返す曜日、さらに西暦と同じ七日周期の曜日が同時並行的に進んでいく。



トゥンガナン暦カレンダーを作成する旧プログラム。グラフィックス処理を得意としたテクトロニクス社製コンピュータの BASIC 言語で書かれているようだ

バリ島の先住民（バリ・アガ）の村のひとつトゥンガナン・プグリンシンガン村（撮影：吉本忍、2017 年）

日本、大阪 ★

カレンダー作成の方針

さて、二〇一七年八月、先延ばしにしていた作業にとりかかることにした。

先の資料をざっとながめて、三つの方針を立てた。まず、カレンダーは紙に印刷して提供することである。ローテクな方法をとれば、PCやインターネットがなくても、どこでも誰もがこのカレンダーを利用できるからだ。一〇〇年分を作成しておけば、当分作りなおす必要はないだろう。

ふたつ目は、カレンダーの見栄えは凝らず、日付を並べただけのシンプルなものにすることである。

三つ目は、杉田さんのプログラムを解析して、Perl という別のプログラミング言語で一から書き直すことである。もし何かトラブルがあったとき、それに対処するには、プログラムの処理内容を十分把握しておくことが不可欠だ。それなら使い慣れた言語で書いておいた方が何かと好都合であると判断した。

カレンダーの作成

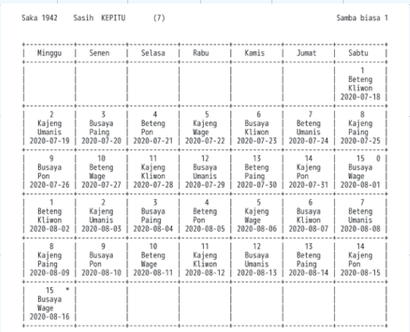
古いプログラムを解析すると、サカ暦一九〇〇年の最初の日は西暦一九七八年一月三〇日にあたり、この年はトゥンガナン暦一年目の月日構成であることがわかった。また、この日の三日周期、五日周期、七日周期の曜日が何かも確認できた。新しいプログラムでも、この日を基準にカレンダーを計算することにした。

完成したプログラムを使って、試しに資料と同じ一〇年分のカレンダーを出力してみた。もしプログラムに何かミスがあるとすれば、その影響は月や年の変わり目や一〇年分のカレンダーの最初や最後の部分にあらわれやすい。その部分を重点的にチェックしたが、すべて一致していた。

つぎに、サカ暦一九三九年（西暦二〇一七年）一年分のカレンダーをこのプログラムで作成し、吉本さんにメールで送ってみた。すぐに吉本さんから連絡があった。吉本さんは自身の手作業でこの年のカレンダーを作成し、わたしのと比較したところ、両者は一致していたとのことだった。新しいプログラムは問題なく機能しているようである。

いよいよ、サカ暦一九三八年（西暦二〇一六年）から一〇〇年分のカレンダーの作成を開始した。カレンダーは両面印刷で三三四枚になった。これを厚さ約六センチメートルのバインダー一冊におさめ、トゥンガナン村へ向かう吉本さんに託した。

コンピュータ・プログラムは永久不変に見えるかもしれないが、実際は時を経ると動かせるコンピュータがなくなっていく。今回、古いプログラムをそれほど苦労なく作りなおすことができたのは、プログラムに加え、そのプログラムで出力した二〇年分のカレンダーと吉本さんのトゥンガナン暦に関する知識があったからである。それにもまして、トゥンガナン暦が現実の季節や太陽、月の運行とのずれをいっさい調整せず、比較的単純なルールのみに従って規則正しく日を刻んでいく暦だったところが大きい。



Saka 1942　Sasih KEPITU　(7)　Samba biasa 1

Minggu	Senen	Selasa	Rabu	Kamis	Jumat	Sabtu
						1 Beteng Kliwon 2020-07-18
2 Kajeng Umanis 2020-07-19	3 Busaya Paing 2020-07-20	4 Beteng Pon 2020-07-21	5 Kajeng Wage 2020-07-22	6 Busaya Kliwon 2020-07-23	7 Beteng Umanis 2020-07-24	8 Kajeng Paing 2020-07-25
9 Busaya Pon 2020-07-26	10 Beteng Wage 2020-07-27	11 Kajeng Kliwon 2020-07-28	12 Busaya Umanis 2020-07-29	13 Beteng Paing 2020-07-30	14 Kajeng Pon 2020-07-31	15 0 Busaya Wage 2020-08-01
1 Beteng Kliwon 2020-08-02	2 Kajeng Umanis 2020-08-03	3 Busaya Paing 2020-08-04	4 Beteng Pon 2020-08-05	5 Kajeng Wage 2020-08-06	6 Busaya Kliwon 2020-08-07	7 Beteng Umanis 2020-08-08
8 Kajeng Paing 2020-08-09	9 Busaya Pon 2020-08-10	10 Beteng Wage 2020-08-11	11 Kajeng Kliwon 2020-08-12	12 Busaya Umanis 2020-08-13	13 Beteng Paing 2020-08-14	14 Kajeng Pon 2020-08-15
15 * Busaya Wage 2020-08-16						

今回書きなおした新プログラムで出力したトゥンガナン暦カレンダー（西暦 2020 年 8 月前後）

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、本館関連の催し物について、本コーナーに掲載の情報も含め、急遽、予定を変更する可能性がございます。詳細につきましては、決まり次第本館ホームページに掲載いたします。何卒ご理解のほど、お願い申しあげます。

新型コロナウイルス感染症拡大予防のための入館に関するお知らせ

展示場の観覧についてのお知らせ

開館時間は通常通りですが、混雑状況により、入場制限をおこなうことがあります。本館展示のご利用にあたっては、事前のオンライン予約をおすすめしております。ご観覧にあたり皆さまにはご迷惑とご不便をお掛けすることになりますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

・本館展示場開館時間
10時～17時（入館は16時30分まで）
・レストラン営業時間
11時～16時30分（ラストオーダー16時）
・ミュージアム・ショップ営業時間
10時～17時

展示場における本館の取り組みなどくわしくはみんぱくホームページをご覧ください。事前のオンライン予約は下記QRコードをご利用ください。

特別展・企画展の会期変更について

特別展「先住民の宝」、梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」の開幕日について、新型コロナウイルス感染症拡大予防のため会期を延期することとなり、現時点で左記の予定となりました。

特別展
「先住民の宝」

世界には、「先住民」と呼ばれる人たちがいます。先住民とはだれか？　「宝」にこめられた思いとは何なのか？　本展覧会では、日本のアイヌをはじめ、北欧、カナダ、オーストラリア、中南米、アフリカ、台湾、ネパール、マレーシアなど、世界各地に暮らすそれぞれの「先住民」が大切にしている「宝」を展示します。

会期　10月1日(木)～12月15日(火)
会場　特別展示館

梅棹忠夫生誕100年記念企画展
「知的生産のフロンティア」

みんぱく初代館長を務めた梅棹忠夫が残したアーカイブズ資料とデジタル・データベースをとおして、フィールドワークから著作への「知的生産」をくわしく紹介します。

会期　9月3日(木)～10月20日(火)
会場　本館企画展示場

みんぱくクラウドファンディング報告

みんぱくクラウドファンディング「世界とつながる――トーテムポールをカナダ先住民のアーティストと造ろう」により、温かいご支援を賜りましたトーテムポール制作プロジェクトですが、6月24日(水)に立ち上げをおこなってから、あらたなトーテムポールも新しいみんぱくの顔としてみなさまをお迎えしております。まだご覧になられていない方は是非、その姿を見にいらしてください。

みんぱく映画会・第48回みんぱくワールドシネマ
「判決、ふたつの希望」

日時　9月12日(土)13時30分～16時30分（13時開場）
会場　本館講堂
司会・解説　菅瀬晶子(本館 准教授)
※要事前申込(先着順／定員112名)、参加無料(要展示観覧券)
※事前予約の方は入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布します。

【申込方法】
本人を含む2名まで。定員になり次第受付終了します。

●友の会(維持会員・正会員)電話先行受付(定員24名)
期間：8月4日(火)～11日(火)
【申込先】千里文化財団友の会事務局
電話 06-6877-8893
（9時～17時、土日祝を除く）

●一般受付
期間：8月12日(水)～9月10日(木)
・オンライン予約
みんぱくホームページのイベント予約専用サイトよりお申し込みください。
・メール・電話予約
予約の際に、①「9月12日ワールドシネマ」、②参加人数、参加者全員の③氏名(漢字・ふりがな)、④電話番号、⑤メールアドレス、⑥住所をお知らせください。
【申込先】千里文化財団イベント予約受付
メール yoyaku-event@minpaku.ac.jp
電話 06-6877-8894
（9時～16時、土日祝を除く）
定員に満たない場合、11時から本館2階講堂前にて当日参加を受け付けますが、満席の場合は入場できません。

ビデオテーク新番組(順次公開予定)

番組番号	タイトル	監修
1757	仮面の王国　マンコン　王の祭り：カメルーン高地	端信行
1758	民博でのカムイノミ： 2016年度「ミンパク　オッタ　カムイノミ」の記録	齋藤玲子
7045	土と火と水の葬送　－バリ島の葬式－	石森秀三、大森康宏 吉本忍
7071	ジャワ島の仮面芝居ワヤン・トペン	福岡正太
7072	西ジャワの仮面舞踊トペン・チルボン	福岡正太
7073	ジャワ島の影絵人形芝居ワヤン・クリット	福岡正太
7075	スンダ人の伝統音楽と楽器	福岡正太
7076	ワヤンとマハーバーラタの物語	福岡正太
7077	ジャワ島チルボンの木偶人形芝居； ワヤン・ゴレック・チュパック	福岡正太
7249	仮面の王国　マンコン　王の祭り：カメルーン高地	端信行
7250	オアシス都市のくらし： ウズベキスタン・サマルカンドの食文化	寺村裕史
7251	アシェンダ！エチオピア北部地域社会の女性のお祭り	川瀬慈

巡回展
「特別展　驚異と怪異――モンスターたちは告げる――」

会期　8月16日(日)まで
会場　兵庫県立歴史博物館
休館日　月曜日
　　8月10日(月・祝)は開館、
　　8月11日(火)は休館
主催　兵庫県立歴史博物館　神戸新聞社
　　国立民族学博物館　千里文化財団
後援　兵庫県　兵庫県教育委員会
　　NHK神戸放送局
　　サンテレビジョン　ラジオ関西
協力　山陽電気鉄道株式会社
　　神姫バス株式会社
特別協力　ライデン国立民族学博物館

お問い合わせ(本館 広報係)
電話　06-6878-8560／FAX　06-6875-0401
https://www.minpaku.ac.jp/

みんぱくゼミナール

会場　本館講堂
※要事前申込(先着順／定員各回112名)、参加無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)
※事前予約の方は入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配付します。
※本人を含む2名まで。定員になり次第受付終了します。

第501回　8月15日(土)13時30分～15時(13時開場)
出稼ぎ先は「小さな国連」――国際貿易都市・浙江省義烏市に暮らすムスリムたち
講師　奈良雅史(本館 准教授)
【申込方法】
期間：7月27日(月)～8月13日(木)
・オンライン予約(定員74名)
みんぱくホームページのイベント予約専用サイトよりお申し込みください。
・当日参加申込(定員38名)※定員はオンライン予約状況によって変動します。
11時から本館2階講堂前にて受け付けます。

※日程の都合上、友の会会員の電話先行受付はありません。

第502回　9月19日(土)13時30分～15時(13時開場)
梅棹忠夫に学んだ知的生産の技術
講師　飯田卓(本館 教授)、小長谷有紀(本館 客員教授)
　　高野明彦(国立情報学研究所 教授)
【申込方法】
●友の会(維持会員・正会員)電話先行受付(定員24名)
期間：8月7日(金)～8月14日(金)
【申込先】千里文化財団友の会事務局
電話 06-6877-8893
（9時～17時、土日祝を除く）
●一般受付　期間：8月17日(月)～9月17日(木)
・オンライン予約(定員50名)
みんぱくホームページのイベント予約専用サイトよりお申し込みください。
・当日参加申込(定員38名)※定員はオンライン予約状況によって変動します。
11時から本館2階講堂前にて受け付けます。

みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう

会場　第5セミナー室
※申込不要(当日先着順／定員各回42名)、参加無料(要展示観覧券)

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域／国の最新情報」「みんぱくの展示資料」について分かりやすくお話しします。

8月9日(日)14時30分～15時(14時開場)
中国におけるハラールフード
話者　奈良雅史(本館 准教授)

8月23日(日)14時30分～15時(14時開場)
オンライン展示の条件――民族誌資料、著作権、公開適正化
話者　伊藤敦規(本館 准教授)

8月30日(日)14時30分～15時(14時開場)
コーヒーと西アジア、そして日本
話者　菅瀬晶子(本館 准教授)

※各イベントについてくわしくは、みんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

刊行物紹介

■川田牧人、白川千尋、飯田卓 編
『現代世界の呪術――文化人類学的探究』
春風社　4,500円(税別)

現代世界で展開する呪術的実践に着目し、それらが日常からたち上がるようすを分析する。合理性、コミュニケーション、感覚／マテリアリティといった視座をとおして、同時代人の営みとしての呪術に接近する。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会

第504回　9月5日(土)13時30分～15時30分
【第500回記念友の会講演会／梅棹忠夫生誕100年記念対談】
知的生産のフロンティアの原点――探検家 梅棹忠夫を語る
話者　石毛直道(本館 元館長、本館 名誉教授)
　　吉田憲司(本館 館長)
ファシリテーター　飯田卓(本館 教授)
会場　本館講堂(事前申込先着順／定員105名)

みんぱく初代館長 梅棹忠夫は、知的生産活動において常に新領域を開拓し続けました。知的生産のフロンティアを歩きつづけた梅棹ですが、研究の根は山からはじまり、その原点は探検にあると述べています。本講演会では、探検家としての梅棹忠夫に焦点を当て、石毛直道第3代館長と吉田憲司第6代現館長の対談をとおしてその思想の源をさぐります。

※無料。受付フォームよりお申し込みください。
https://www.senri-f.or.jp/umesao100/
※対談の様子を後日、友の会のホームページならびにユーチューブのみんぱく友の会チャンネルで公開します。
※本講演会は、2020年5月に予定していた第500回友の会講演会を延期して開催するものです。

第505回　10月3日(土)13時30分～14時40分
【特別展「先住民の宝」関連】
トーテムポール――カナダ北西海岸先住民の宝
講師　岸上伸啓(本館 教授[併任])
会場　館内セミナー室
※会員無料(会員証提示)、一般500円

オンラインレクチャー公開中！

友の会のホームページ内でミニレクチャーを公開しています。いつでもどこでも友の会をお楽しみください。

梅棹忠夫生誕100年記念企画展
「知的生産のフロンティア」に寄せて
話者　中牧弘允(本館 名誉教授、千里文化財団 理事長)
第1回 梅棹忠夫が残した「こざね」とはどういうものか
第2回「こざね」から復元する梅棹忠夫の『日本人の宗教』
https://www.senri-f.or.jp/tomomovie000/

世界の
バスケタリー
×
バスケタリーの
世界

バスケタリーに満ちた供物の世界

インドネシアのバリ島でおこなわれる儀礼には、神々や祖霊に捧げる供物が欠かせない。供物の器や装飾には、身近な植物素材から手作りした編み組み製品が用いられてきたが、時代の流れとともにそのかたちも変わりつつある。

中谷文美（なかたにあやみ）
岡山大学教授

儀礼を彩る供物

フィールドワークのために一九九一年からインドネシアのバリ島の山村で暮らし始めたわたしは、同居していたバリ人家族やその親族、あるいは村内の市場や商店で知り合った人たちから誘われるままに、ありとあらゆるタイプの儀礼に参加させてもらった。

バリの儀礼に欠かせないもの、それは大小さまざまの供物である。屋敷内外の数十カ所に毎日供える簡単なものから大がかりな祭礼のための大量かつ複雑なセットにいたるまで、供物にはおびただしい種類がある。儀礼の目的ごとに用意すべき供物は異なるが、ヤシの葉を加工した入れ物にバナナなどの果物、花、もち米や米粉で作った菓子、円錐状に成形した白飯などを並べて作るものが基本型となる。

一部の例外を除いて、供物作りは女性の仕事である。祖先を祀った祠（ほこら）や寺院の周年祭、婚礼などの準備は約一週間にわたっておこなわれる。そのあいだ、関係する女性たちは毎日のように集まり、おしゃべりに花を咲かせながら供物作りに励むことになる。

供物を形作る編み組み

儀礼準備の共同作業は必ず、大量の器作りから始まる。おもな素材となるのはココヤシ（*Cocos nucifera*）の若い薄黄色の葉とサトウヤシ（*Arenga pinnata*）の濃い緑の葉で、柔らかさの違いや色の濃淡に起因する象徴的な意味に応じて使い分けることになっている。目的別にヤシの葉を切りそろえ、折ったり曲げたりしたものを組んでタケヒゴで留め、円形、三角形、正方形などの形に整える。

年配の女性が慣れた手つきで小刀を使い、どんどん伐（き）りだしていく素材を、別の女性たちがひたすらタケヒゴでつないでいく。重ねた葉をタケヒゴで留める作業は、実際にやってみるとタケヒゴがすぐに折れてしまったり、力を入れすぎて葉が破れてしまったりと、意外にむずかしい。ほかにココヤシの葉を複雑な形に切りそろえ、ところどころにユーモラスにも見える模様を刻み込んでから組み合わせていく器などもあった。

バリの儀礼に登場する植物素材の編み組み製品は、供物用の入れ物だけではない。儀礼時の会食に用いられる四角いお盆状の皿や敷物はサトウヤシの葉を組んで作る。農事暦に合わせて稲の女神デウィ・スリに供物を供える儀礼では、各農家が女神を象った細工を用意する。また、バリ暦の一年（二一〇日）に一度めぐってくるガルンガンという祭日には祖霊が各屋敷地の祭祀場（さいしじょう）に降臨するとされているが、この日が近づくと、村の女性たちはこぞって祠や屋敷地の入り口を飾るためのヤシの葉細工作りに精を出す。

移りゆく儀礼準備のかたち

新鮮な葉で作られたこれらの飾りは見た目にも美しいが、何日か経つうちに変色し、干からびていく。儀礼のために用意された精巧な供物群も、神々や祖霊、悪霊に捧げる目的を果たした後は、地面に打ち捨てられてしまう。つまり、儀礼の度ごとに女性たちはまたせっせと手を動かし、多種多様の器や飾り細工を作り続けることになるのである。バリの暦に従って儀礼の多い季節が近づくと、市場には束にしたココヤシとサトウヤシの葉が大量に出回る。特にココヤシの葉は島内だけでは需要がまかなえず、隣接するジャワ島から輸入しているという。

手のかかる細工については、朽ちやすいココヤシやサトウヤシではなく、乾燥させたパルミラヤシ（*Borassus flabellifer*）の葉で作ることもある。保存がきくため、儀礼に先立って作り置きもできるし、使いまわしも可能だからだ。わたしが長期調査をしていた一九九〇年代初めに比べると、出来合いの儀礼用ヤシ細工や供物用の器を置いている店が今は増えた。供物の一部もしくは全部をまとめて外注するケースも珍しくなくなった。さらに驚いたのは、供物用の器や飾りを作るのにホッチキスが使われるようになったことである。

かつての村の儀礼では、婚礼や葬儀にしろ、祖先祭祀にしろ、より多くの人が集まって一緒にわいわいと準備することそれ自体に価値があると考えられていた。だが時代の流れとともに、お金があれば労力をかけずにすむという効率重視の考え方に置き換わりつつあるようだ。身近な植物素材を加工して供物を作るというやり方にも、いずれ変化が訪れるのだろうか。

上：集まって供物作りをする女性たち。かつてココヤシの葉で作られていた細工がパルミラヤシに置き換わっている（インドネシア、バリ州、2016年）
左：スーパーマーケットで売られているガルンガン用の供物（インドネシア、バリ州、2012年）

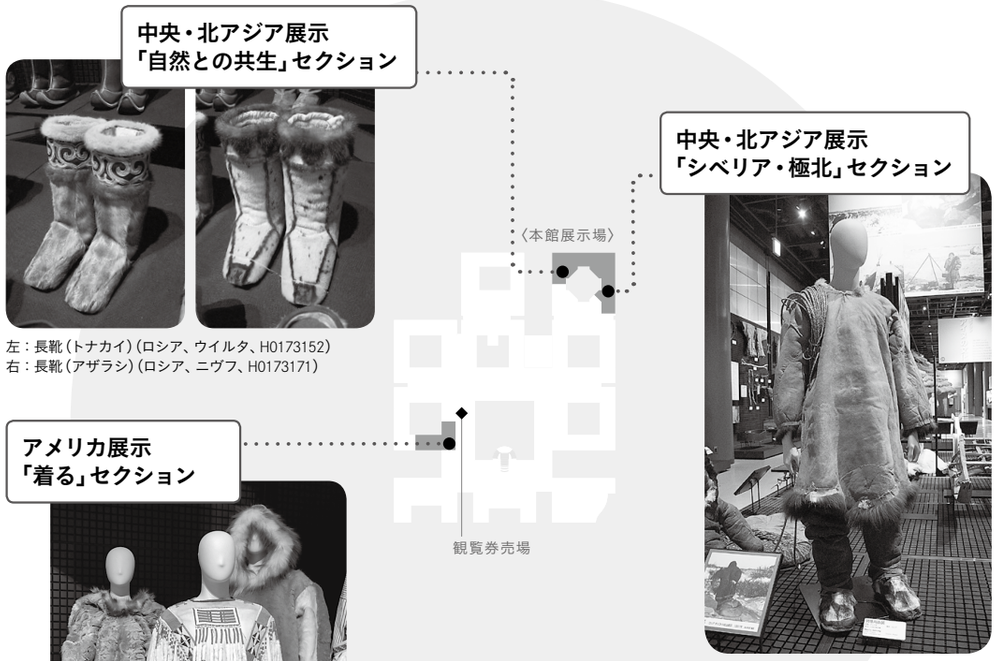
ホッチキスで留められた供物用の細工（インドネシア、バリ州、2008年）

ココヤシの若い葉を細工した器に、花や米、調味料などを入れた供物の例（インドネシア、バリ州、左上：1991年、左下・右：1993年）

毛皮、必需品から見栄え重視？へ

民博 学術資源研究開発センター　齋藤（さいとう） 玲子（れいこ）

左：長靴（トナカイ）（ロシア、ウイルタ、H0173152）
右：長靴（アザラシ）（ロシア、ニヴフ、H0173171）



男性用衣装（ロシア、チュクチ、上衣：H0278350、長靴：H0278351 ほか）

極北の衣装（女性用）（左、カナダ、イヌイット、H0212847）
極北の衣装（男性用）（右奥、カナダ、イヌイット、上着：H0212848、手袋：H0212849、ズボン：H0212850、靴：H0212851）

真夏にそぐわない話題で恐縮だが、雪と氷に覆われた寒い土地を想像しておつきあいいただきたい。わたしは、みんぱくに勤務する前は、北海道立北方民族博物館（網走市）の学芸員をしており、世界の北方地域の先住民について、比較研究をしてきた。地理的にはひろいが、環境が似ていることから文化には共通点が多い。そのひとつが毛皮の利用である。

毛皮の用途といえば、まず防寒である。進化の過程で体毛が退化したヒトが寒冷地で暮らしていくためには、他の動物の毛皮を利用することが必要だ。毛には、真っ直ぐで太い保護毛（刺し毛（げ））と短く繊細な下毛（綿毛（わたげ））があり、その組み合わせや本数は種によって異なり、温かさや丈夫さと関係している。

北方で利用される毛皮の代表はトナカイで、衣服のみならず、テントの覆いや寝具などにも用いる。トナカイは、新旧両大陸の北部に生息し、北アメリカではカリブーとよばれる。トナカイの毛皮は、一本の保護毛のなかに多くの気室があり、たくさんの空気を含むため、断熱性が極めて高い。しかも、冬の保護毛は太く長くなり、気室が増加することもわかっている。アメリカ展示の「着る」セクションにある、カナダ・イヌイットのパーカとズボンの本体はいずれもトナカイ皮から作られている。フードの顔のまわりにあたる部分の毛皮はクズリだろう。

一方、イヌイットの男性の手袋とブーツの素材はアザラシである。アザラシの毛は密度が低く、毛髄が発達していないため、保温性には欠けるが、水に強く丈夫である。靴は毛並みがつま先からかかとに向くように作られ、上り坂では滑り止めになり、下り坂では前に滑る。山スキーの滑走面に付ける毛皮をシール（seal：アザラシの英名）とよぶことをご存じの方は多いだろう。

中央・北アジア展示には、シベリア北東部に住むチュクチとコリヤークのトナカイ毛皮の衣類が展示されているが、毛が内側で皮の面を表にしたものもある。これらは、春・秋のさほど寒くない時期や服の下に着るもので、厳寒期にはその上に毛を外側にした服を重ねる。トナカイ飼育をする彼らのブーツは、トナカイの脚の毛皮で作られている。

そこでぜひ見ておきたいのが、中央・北アジア展示入口の帽子と靴である。向かって右から左に北アジア、モンゴル、中央アジアの資料が並んでおり、それぞれの地域に毛皮製品があるが、もっとも多用しているのはやはり北アジアである。数が多いため、ひとつひとつの資料のキャプションに動物の種までは書かれていないものの、ブーツに使われている毛皮はトナカイの脚のものが多く、アザラシ毛皮製のものもある。

中央は中国東北部のオロチョン族の衣類。服はノロジカの胴体、靴は脚、帽子は頭の毛皮で作られている。このように「動物が着ていたとおりに」人間も着る、という毛皮の使い方もひろく共通している（外套：H0129684、手袋：H0129685、靴：H0129686、帽子：H0129687）

換金目的の毛皮猟

一七世紀ごろからのヨーロッパにおける毛皮需要の高まりによって、シベリアや北アメリカ北部は毛皮の供給地として開発され、先住民らも巻き込まれていった。先住民たちは、トナカイやアザラシを毛皮のみならず、肉や内臓など余すところなく利用したが、ヨーロッパで需要があったクロテンやラッコなどいわゆる毛皮獣とよばれる動物の毛皮は、先住民のあいだではあまり使われず、肉も利用されていなかった（ビーバーは毛皮も肉も利用していた）。中央・北アジア展示には、クロテンやオコジョ、キツネなどを捕るためのワナが展示されている。毛皮を傷つけないように工夫されたものや、アメリカから導入されたトラバサミなども先住民のあいだでひろまった。自家用ではない毛皮を得るために、狩猟の方法も変わったのだ。

フェイクファー

みんぱくに赴任してからは、アイヌ文化の研究を中心にしてきたため、毛皮とのつきあいはご無沙汰していた。和人との接触が増えるに従い、アイヌの服に毛皮は用いられなくなっていったからである。

本稿を書くために、改めて展示場内の毛皮を探して回り、気づいたことがあった。中国の獅子舞やインドネシアのバロンとランダなどの仮面や装束にも毛皮がついている。展示されている資料には、化学繊維で作られたいわゆる「フェイクファー」が用いられているようだが、もとは何の動物だったのか、北方地域のこと以外は知らずにいた。いずれ調べてみたい。

ちなみに中央・北アジア展示に展示されている資料にも、フェイクファーが使われているものがある。欧米でも日本でも最近の服に用いられるのは化繊のファーが主流となり、本物の方をリアルファーとよぶようになっているのだから、それも時代の流れか。

ランダ（左、インドネシア、H0276316）
バロン（右、インドネシア、H0276315）

シネ倶楽部

マレーシアの光と影

信田（のぶた）敏宏（としひろ）
民博 グローバル現象研究部

「斧は忘れても、木は覚えている」

原題：The Tree Remembers（還有一些樹）

2019年／台湾／マンダリン、英語、マレー語、オラン・アスリ語／89分
監督：ラウ・ケクフアット

抹消してはならない歴史

本作の舞台はマレーシア。開発による森林伐採に苦しむ先住民オラン・アスリの現状と、一九六九年にマレー人と華人のあいだに起きた民族衝突事件である「人種暴動」の隠された真実に迫るドキュメンタリー映画である。人種暴動に関しては、その原因や実態など、マレーシアでは公に議論することはいまだ許されてはいない。こうした事情から、本作がマレーシアで上映されるか否かは定かではない。

ここでは、紙幅の関係上、オラン・アスリの話をおもに紹介してみたい。本作にはオラン・アスリの小説家マハット・アキヤが登場し、オラン・アスリの苦難の歴史を語る。マレーシアではかつて、ムスリム（イスラム教徒）であるマレー人が、非ムスリムのオラン・アスリを奴隷としていた時代があった。二〇世紀初頭まで、オラン・アスリの集落はマレー人による奴隷狩りに遭っていた。襲撃者はパランという大きな山刀で村を襲い、多くの村人が殺され、子どもや女性が連れ去られた。子どもはマレー人の養子となり、女性は妾（めかけ）や売春婦として売られたという。襲撃の前にパランを研ぐ大きな石は、現在も各地のオラン・アスリ集落近くに残されており、本作でも紹介されている。奴隷狩りはオラン・アスリの負の歴史のほんの一部にすぎない。マハット・アキヤは「オラン・アスリの抑圧の歴史は抹消してはならない」と語る。

失われゆく森

奴隷狩りを恐れた人びとは、より内陸部へ、より奥地へと逃げ込んでいった。しかし、オラン・アスリの苦難は、形を変えて今も続いている。生活の糧となる森が恐ろしい勢いで失われているのである。環境保護団体からの非難に耳を傾けることなく、マレーシア政府は森林伐採を進める。アブラヤシのプランテーション開発や木材生産のためだという。都市や町の周辺部に始まり、今ではペラ州やクランタン州などの奥地の森にまで開発の手は伸びてきている。そうした開発には利権がつきまとい、利権の裏にはギャング集団の暗躍も噂（うわさ）されている。マレーシア発展の影には、オラン・アスリや自然環境を犠牲にした開発や森林伐採、そしてその裏に隠された暗部があると言っても過言ではない。

鼻笛を吹くオラン・アスリ（トゥミアール）の男性（提供：ラウ・ケクフアット、ペラ州、2016年）

上：森林伐採によって完全に破壊された森の果樹園（提供：ラウ・ケクフアット、ペラ州、2017年）
下：緑に囲まれ、自然豊かなオラン・アスリ（トゥミアール）の集落（提供：ラウ・ケクフアット、ペラ州、2016年）

本作では、熱帯雨林に覆われたダイナミックで美しい自然環境や、のどかな村のなかで無邪気に遊ぶオラン・アスリの子どもたちの姿が、オラン・アスリ伝統の鼻笛の音色とともに映し出されている。

一方で、こうした情景の儚（はかな）さを物語るかのように、オラン・アスリの村の村長の歌が響き渡る。ランブータンやドリアンの果樹園を失い、絶望した村長がマレーシア国歌のメロディーに合わせて替え歌を歌う。「美しい月の光が川面に映り、ワニもいたのだが、死んでしまったそうだ。政治家の約束を信じちゃいけない。約束が実現したためしがないから」。前半のクライマックス、映像は一頭のゾウに切り替わる。森林破壊で森から出て、高速道路を歩いているところだ。この直後の映像には胸を締めつけられる。

「人種暴動」の残したもの

映画の後半は、「人種暴動」に焦点を当て、親族を殺された華人、虐殺の現場を目撃した人、さらには華人との共生を模索するマレー人などのインタビューが続く。人種暴動の後、マレーシアでは、マレー人を優遇するブミプトラ政策が推進された。政府は、暴動や民族対立の原因をマレー人と華人の経済格差ととらえ、マレー人を優遇することによって、マレー人の華人に対する敵意を和らげようと考えたのである。その後、マレーシアでは大規模な民族衝突事件や暴動が起きていないという点で、ブミプトラ政策は一定の効果をもたらしたといえる。しかし一方で、多くの被害者を出した華人には優遇措置がなく、マレー人以外の民族のあいだでは、現在もブミプトラ政策に対する批判が根強く存在している。

本作のタイトルは、「斧は忘れても、木は覚えている」というアフリカのザンビアのことわざからとられたものだという。映画を観た後、このタイトルが心に深く訴えかけてくる。

ことばの迷い道

「嘉玲」が帰ってきたよ

野林 厚志
民博 学術資源研究開発センター

何年か前から気になっているのが、台湾の車両番号である。台湾ではアルファベット三つと数字四つの組み合わせで車両番号がわりふられる。これらの「諧音」（いわゆる語呂合わせ）がじつに多様であり面白い。日本だと、かつてポケットベルなるものが使われ、例えば、「4649」が「よろしく」（夜露死苦のような「ヤンキー語呂」もあったが）ということばを表現したのと同じようなものと考えてよい。ただし、台湾は多言語社会であり、語呂合わせの音が複雑である。

台湾は一七世紀の後半から対岸の福建省や広東省からの漢族系移民が増加した。福建省からの移民のことばは閩南語と総称され、これが現在の台湾住人の大半が母語とする狭義の台湾語（台語）の基礎となっている。広東省からの移民は客家とよばれ、独自の客家語を母語にもつ。漢族系の人よりも先住してきたオーストロネシア系の原住民族は、各民族集団特有のことばを話してきた。第二次世界大戦後に台湾で政権をとった国民党は、北京官話を基本とする普通語（國語）を公用語とし、日本統治時代（一八九五～一九四五年）には日本語が台湾に普及した。こうした、「ちゃんぽん」な言語状況のなかでの「諧音」はこちらの予想をはるかにこえる。とはいえ、基本となるのは「國語」と「台語」である。

最初に車両番号の語呂合わせを知ったのは、台南でシラヤ族の段さんや国立台湾歴史博物館の謝副館長（当時）と食事に行ったときであった。レストランに派手なスポーツカーが並び、若者たちがたむろっているのを見て、車両番号が「0857」じゃないのと話していたので、どういう意味かをたずねると、「0857」は「您爸有錢」（あなたのお父さんはお金持ち）の「台語」発音の諧音で、ちょっと裕福な連中が車両ナンバーに使うことがあると言う。面白くなってしまい、行き交う車のナンバーの諧音をしつこく聞くものだから、わたしが助手席に座ると、運転してくれる人が番号に気をとられて道を間違ってしまうこともある。

じつにさまざまな語呂合わせがある。例えば、上二桁の「52」は「我愛」なので、下二桁で相手の名前をあらわすと、とても甘いナンバーになる。別れてしまうとプレートを変えないといけなくなりそうだが、そんなときは車両ごと乗り換えてしまうとよいというのはいかにも合理的な弁であった。「5438」は「我是三八」であり、女性は避けたい番号である。「三八」は諸説あるのだが、うるさい女性をあらわす台湾の古いことばだそうである。数字だけではなく、アルファベットも奥深い。DPP（民進黨）、KMT（國民黨）といった政治もの、FUCやASSといった避けたいスラングなど、なかなか気を遣うようである。運輸支局にあたる部署は、よくない意味にとれる車両番号は発行しないようにしていると聞く。

こうした語呂合わせは最近の新型コロナウイルスの場面にもあらわれている。新型コロナウイルス感染者が出ていないのは、「加零」（±0）と表現され、「加零」の音は、七〇年代から九〇年代にかけて台湾の女性によくつけられた名前の「嘉玲」と同じである。「『嘉玲』が帰ってきたよ」とニュースで報道された日は、新型コロナウイルスの新規感染者がいないことがわかる。

民主化が軌道にのる一九九〇年代以前、台湾は表現の自由を著しく制限されてきた。そうした環境のなかで根づいてきた表現の巧みさが、街のちょっとした風景から見てとれるのはじつに面白いのである。

月刊みんぱく 2020 8月号

編集後記

本誌の特集テーマは、遅くとも刊行の5～6カ月前に決めている。今号の特集テーマ「ヒトと感染症」は、クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」の乗客の下船が始まった2月19日、対面の編集会議で決まったものだ。よもや新型コロナウイルスの国内感染がここまで拡がり、在宅勤務が始まろうとは予想もしていなかったころである。先見の明ありといいたいところだが、種を明かせば、東京オリンピック・パラリンピック関連のテーマと執筆者探しに苦戦し、諦めたなかで出てきた窮余の案だった。図らずも五輪の延期を見通していたかのような、時宜に適(かな)った特集となった。

今回の新型コロナウイルスの拡散と経験からわたしたちは何を学ぶのか。それにはヒトが感染症をいかにとらえてきたかや、他の感染症にいかに対処しているのかを踏まえねばなるまい。特集の各論稿と巻頭エッセイは、（西洋）医学上の議論に矮小(わいしょう)化されがちな感染症を社会的、文化的にとらえる視点を縦横に拡げてくれる。

すっかり日常の風景となったマスク。だが、口の形が読めなく困っている聴覚障害者を置き去りにして過剰に進んでいる面はないだろうか。異なる他者の事情に思いをめぐらす、人に優しい新しい生活様式を作っていけないものか。そんな問いかけやさまざまな思いを込めて、今号の『月刊みんぱく』（表紙）はマスクをしている。（南真木人）

次号の予告

特集

「ウポポイでアイヌ文化を魅せる」（仮）

みんぱくをもっと楽しみたい方のために

国立民族学博物館友の会のご案内

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。
毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

維持会員・正会員
『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加　など

ミュージアム会員
『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加　など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もございます。目的にあわせてご利用ください。

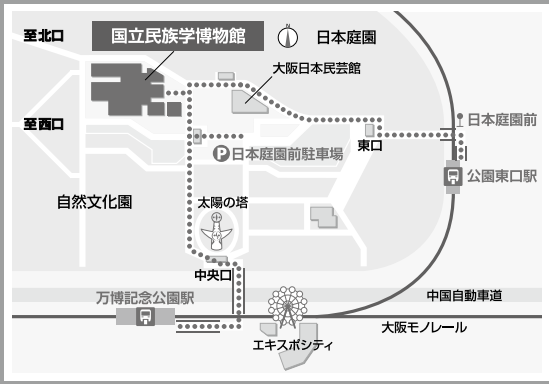
詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話 06－6877－8893／平日9:00～17:00）

月刊みんぱく 2020年8月号
第44巻第8号通巻第515号　2020年8月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　園田直子
編集委員　南真木人（編集長）　上羽陽子　齋藤晃　菅瀬晶子　三島禎子　吉岡乾
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　株式会社 遊文舎

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ　https://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック　https://www.facebook.com/MINPAKU.official
みんぱくツイッター　https://twitter.com/MINPAKUofficial
みんぱくインスタグラム　https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/
みんぱくYouTube　https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology